

南支から中支へ

召集の思い出(その二)

愛知県 竹内 章

徐州は火野葦平の著書『麦と兵隊』で良く知られ、国民からも軍歌として愛唱されている。ここは日本軍が昭和十三(一九三八)年五月十九日、占領したのであるが、昔からの立派な街で、開封から連雲港に至る隴海線の交差点で、中支きつての貨物の集積地であり、軍事上からも重要拠点であった。

我が部隊は、暑い常夏の国から寒冷地へ来たので、先輩の戦友に尋ねて見ると、冬は最低零下十八度位まで低下し、鉄パイプなどを素手で触ると吸いつくので触らないようにとの注意を受ける。また春には砂塵が舞い、部屋中、砂埃であると予備知識を得たものである。

我が部隊の入る病院は設営中で、その間暫く仮宿舍

に入り待機することとなる。専兵団司令部は、徐州の町はずれにあるので、毎日命令受領のため公用外出しなければならぬ。

ある日、天気は良いし暖かく、急ぎの書類もないので、好奇心から、いつもと違う道を通ることにした。これは徐州を一日も早く知るためで、師団司令部への再短距離を探るためでもあったが、これが部隊を騒がせる結果になるとは露ほども知らなかった。

師団司令部で書類を受領した帰路、時間に余裕があったので新しい道を通ることにした。ところがどこでどう道を違えたのか、行けども行けども麦畑で迷路に入ってしまったようである。何だかだんだん遠くなっていくようだ。時計を見れば、かなりの時間経過である。麦また麦で麦畑の海である。麦の丈は私の肩まで、あるいは背丈ぐらいあるので方角すら分からない。今から引き返そうと思ったが、余計に道に迷うだけであろう。人に方角を聞くにも言葉が分からず、また敵か味方かの判断もできないのではと困り果てた。

その内に周囲は薄暗くなってきたし、腹は空いてきた。下手に行動するよりも暗くなるのを待とうと腹を決めた。麦畑の中に身を潜めて待機の姿勢である。自分の判断では、暗くなれば恐らく町の明かりで方向が分かるであろうと思った。やがて月は昇り周囲は暗くなった。

小高いところへ上がり四方を眺めると、ある一つの方角の空にポーと明かりがある。その方向が徐州であろうと判断し行動開始である。人間というのはおかしなものだ。大胆であったのが途端に淋しく臆病になっってしまう。単独であるので話相手のないということ、は、本当に淋しいものだとつくづく思った。同時に人影におびえ、人を見ると敵に見えはじめた。さらに、この辺は敵地区と思え、すべて隠密行動であるので、時には道路を走るように、時には麦畑にかくれての行動だけに思うようにはかどらず、目的地までが非常に遠い。

全神経を傾倒しての行動だけに、空腹と疲労で夢遊病者のようにフラフラである。無我夢中で何時間歩い

たであろう。やっと明るい町へ辿り着くことができた。明るいところで時計を見れば既に午前零時を過ぎている。

町中をアチコチと見覚えの建物を探し歩いた。その建物を発見できた時の喜びは筆舌に表わせない。その場にヘナヘナとしかけたが、戦友が恐らく心配していると思うと、心をしっかりと持って仮宿舍まで走るように歩いた。

部隊に着いた時は心身ともに使い果たした気持ちであった。私の帰隊が余りにも遅いので、部隊では心配して搜索隊が出動するところであった。特に本部の諸君は寝もせずに待機してしてくれたとの事で感激も一入であった。私は「ああ、助かってよかった」と思う反面、部隊の人達に心配をかけて申し訳ない、済まなかったと思えば班長他戦友に平謝りである。

仮宿舍でする事もないので、本部付・寺井班長以下の部員で、対抗ジュエスチャー競技を行い一時を楽しんだものだ。

徐州へ移駐して最初の作戦命令である。津浦線の畔埠頭で下車、河口で糧秣、梱包の積載使役である。舟に渡す四〇センチ幅の踏板を渡つての積み込みである。糧秣の南京袋は一袋八〇キロである。これを背負って踏板を渡ることは重労働であり、危険であった。積載完了と同時に、乗舟し奥地へ溯江、上陸地点で下舟、糧秣舟に浸水、米が水浸しであるが捨てるわけにはいかず当分の間、臭いのついた飯だ。

河川敷から対岸の部落へ野砲が砲撃している姿は凄まじい。命中した家屋は粉々にふっとんでいるのが肉眼でも見える。設営地の割り当てを受けて宿営することになった。ところが糧秣不足で副食が足らず、現地調弁することとなった。指揮者・溝越経理軍曹に引率されて出発、参加者七人程度、装備は軽機関銃一、歩兵銃と拳銃。各部落へ行っても鶏、豚はおらず、住民もどこかへ隠れたか一人もおらず、だんだんと奥へ奥へと進んでしまった。

鶏、豚を捕獲し、さて帰路についた折、彼方で砂塵がモウモウと立ち昇る。直感で敵の騎馬隊と気付い

て、獲物が声を出すと発見される恐れがあるので、せっかくの獲物ではあるが投げ出して、麦畑に身を屈めて銃を構え、息を殺す。身動きもできず、苦しい小半刻であった。

三十騎ぐらいと思ったが、一時停止して状況判断していたようであるが、そのまま行き過ぎていった。放した獲物を再度、捕獲して、夕暮れ時には宿営地へ帰隊できた。食糧徴発は面白味もあるが命がけであるとしみじみと思った。次の宿営地では作戦司令部と離れたので、部隊長命令で騎馬で行くように命ぜられた。この時、こんな事になるなら乗馬の稽古をしておくのだったと思った。

乗馬の仕方、馬が走り出した時の落馬防止を護衛の輜重兵しじゆうへいより教わり、乗馬で命令受領に行くこととなった。何か不吉な事ばかり思い出されるが仕方ないことと思つた。さて乗馬することとなったが馬が大きいので参つたのと馬が振り返って私を見る目が嫌な氣持ちだ。馬の首筋を撫で、軽く叩いて、立髪を左手に

巻き、足を鎧に掛け、右手を鞍にかけて乗ったら上手に乗馬できた。両膝で馬の胴をしめ、いよいよ出発である。

護衛は輜重兵の兵長以下四人である。乗馬して見ると意外と高いので、目のやり場に弱った。何だか心もとないが、気候は良いし、ゆっくりと進んでもらうことにした。行きは非常に快適で楽しくもあった。

命令を受領し帰途につく。野景色を眺め目を四方に配っていると、突然「ビューン、ビューン」と狙撃された。護衛の馬が走り出し、私の馬もこれに続く。突然の成り行きで私は馬上でオロオロしているばかりで声も出ない。今にも落馬しそうで、命がけだと思った。

また豪雨で増水し道路が冠水した中を、乗馬で受領に向向したが、馬は平気で進み無事に帰隊できたのは馬に感謝でいっぱいだった。その後、乗馬の稽古をと思ったが、ついにそのチャンスはなく駄目であった。

作戦を終了して帰途のことである。軍用列車（貨物

列車）に乗車、装具を背に積み上げ、扉を全開して貨車の中央に十数人が円座になり、現地徴発した中国酒と落花生を肴に祝杯を上げていた。酒も回り気分も良くなり、手拍子よろしく、軍歌演習が始まった。列車が大きく横揺れした時、「アッ」と大きな声が出た。瞬間である。車座の席が一つ空いているではないか。

「しまった誰か落ちたな」と直感して誰が落ちたと聞くと、隣席から渡辺上等兵ですとの事、列車の外を見ると渡辺上等兵が立ち上がり、手を振っている。緊急停車を合図する列車の中の紐をグッと力いっぱい引張った。列車はキシミを発しながら急停車した。

走り寄った渡辺上等兵を引っ張り上げた。傷でもあるかと思つたが、大したこともなくカスリ傷程度であったので、全員ホッとした。間もなく何事もなかったように列車は発進、その後何事もなく徐州へ到着した。

本院も開設されたが、室内が何度掃除しても、どこからともなく砂塵が入り汚されるのには参り、あとあととも一つの悩みでもあった。

私はどうも酒の上の失敗が多いようである。ある外出日、帰隊時刻も来たので、一升瓶を肩に小唄を唄いながらの帰り道、前方より年若い少尉が来たので敬礼をしたところ、態度が悪いとかで一発くらったので、私も何気なく持っていた一升瓶で殴ってしまった。少尉は「上官暴行で、憲兵隊に訴える」と怒った。私も負けずに「私的制裁が禁じられている今日、訴えられるものなら訴えて見よ、初年兵のくせに生意気だ」と反論して帰隊してしまった。酔いがさめてから、自分の軽率な行動を反省したものであったが、どういふことか何事もなく、いまだに不思議に思っていることの一つである。

こんな調子で外出日には、軍人会館や立食い寿司屋に良く行ったものであるが、ある日、軍人会館で映画観賞があつて、一杯飲んで出掛けた折、ついうとうととしてしまった。目が覚めると、私が一番大切にしている、三水から持って来た懐中時計が盗まれている。三本の鎖がかけてあつたものをと、こんな口惜しく残念なことはなかつた。この後、深酒を慎みだした。こ

の頃「飲んだくれの竹さん」「髭の竹さん」とニックネームがついてしまった。

各地に患者療養所が開設されたが、私は海州患者療養所勤務を命じられ、協軍医大尉の指揮下に入り、本部と発着の担当となる。この患者療養所は非常に広く、患者の収容能力も大きく、内科病棟、外科病棟、伝染病棟、診断室、治療室も完備、薬室、本部発着、兵舎も営庭も広く、医療活動が行いやすく合理的な療養所と思われた。

この地域は八路軍との衝突が多く、私はどういふめぐり合わせか、あるいは本部付なるが故か知らないが、ほとんどの作戦には参加を命ぜられ、私は自らを作戦要員だと思ふやいたものであるが、よく内地へ無疵で帰還できたものだと思概も一入である。

ある時、隊長当番の同年兵が、一度、夜間の外出がしたいと言うので、彼の希望を受入れ「公用外出」という名目で案内してやった。彼が遊んでいる間、私は酒を注文し、一杯飲んでいた。間の悪い時は悪いもの

で、旅団の週番将校の巡察に会ってしまった。週番将校は奥へ調べに入ってしまったので、随行の兵隊二人に一杯機嫌でからかっていた。その私の後に週番将校のいるのも知らずにいたのが大失敗、声を掛けられてビックリしてしまった。理由を問われ、勧告を受けた。同年兵は上手に逃げてくれたのが何よりであった。

翌日、旅団司令部へ命令受領に行つたところ、旅団会報に私の事が載り、他にも脱柵兵のことが二、三載っていた。私は困つたことになつてしまつたと思ひ、この会報を受付簿にのせず焼却してしまう事を決意し、戦友に話をして、万一分かれば私が責任をとることにした。すぐストーブで焼却しヤレヤレと思つた。悪事千里を走るの例えの通り、悪い事はできないもので、同じ会報が本隊にも届いていたのである。

即日、本隊から那須准尉が出張して来た。脇隊長と用談していた模様であつた。恐らく私の問題であると思ふ。その後、譴責けんせきもなく不問にしてくれたようだ。日頃が大切だなど、自分勝手な考え方をしていたが、

両上官には感謝でいっぱいであつた。

部隊内で初年兵受領の噂が出た。真実なら一度内地の土が踏みたいたと思つた。誰になるか、発表まで期待まちである。小倉兵長から連絡があつて「俺が初年兵受領に行く内命を受けたので、時間が許せば君の自宅に立ち寄つてもよいが、何か伝言はないか」とのことである。私は行きたかつただけにガツカリしたが、仕方ないと思ひ、小倉兵長に「元気でやっているから心配ない」と伝えてくれと依頼した。

無事に初年兵受領の大役を終えて、小倉兵長は帰隊し私に報告してくれた中に「昭和十九年十二月七日、東海地方大地震があり、半田市は非常に被害が大きく、中島飛行機製作半田工場への、学徒動員の生徒が多数、倒壊家屋の下敷きとなつて被災死した。また私の家もかなりの被害を受け、余震で一週間は四人家族が外のテント生活であつたが、皆元気で無事」とのこととで安心した。

即座に同郷の戦友から二百円募金し、半田市宛に慰

問金として為替送金したけれど、何の首沙汰もなく届いたか、届かなかったか、いまだに不審なことの一つでもある。

私が衛生伍長に任官早々のことである。内科担当の兵隊が、あの将校には困ったものだということで理由を聞くと、兵科の大隊長が将校病室（個室）に入院しているが、病状が良くなると、また悪化する。この繰り返して退院できるものができず困っているというのであった。私はつい義侠心を出してしまい、私が不審番を交代し様子を見ることにした。

私が病室に入ると色々な食品が置いてあるので、その大隊長の当番兵に質問したところ、大隊長命令で、外出して大隊長の好物を買って来て与えているとのことだ。私は大隊長に「入院中は勝手な振る舞いはやめて、衛生兵の指示に従って、一日も早く全快して、原隊復帰して下さい。優秀な部隊長の治療復帰を部下の人達は、一日も早いことを一日千秋の思いで待っておられる事でしょう。大隊長の退院の遅れは、大隊に

とつても、師団にとつても大きな損失ではないでしょうか」と話したところ、一喝のもとに「下士官ごときに説諭される覚えはない。貴様は生意気だ」と強く叱責されたので、私も引くに引けず、つい気合を入れてしまったが、揚げ句「上官侮辱だ、軍法会議もんだ、憲兵隊に通告する」と激しい言葉である。

既に私は覚悟の上でもあったので、私も負けず「大隊長は入院中の身であり、行いは診療軍紀違反であり、同時に前線原隊復帰拒否で銃殺ものだ」と反論、「大隊長を告訴する。相互に一等兵降等なら望むところやましよう」と互いに口論は果てしなかったが、大隊長が急に折れて、私の意見に従ってくれる事になり、その後大隊長の病状は急激に快方に向かい、間もなく治療退院原隊復帰したのである。

後日作戦に参加した時のことである。私が命令受領に行くとき、この大隊長からの命令下達である。その時、大隊長は「竹内伍長、入院中は大変世話になって有難う。患者には環境が大切であるから設営について一番良い宿舎を取りなさい」と言われ割り当ててくれ

た。この時程感激し嬉しかった事はなかった。

作戦終結で部隊に復帰し、慰労外出があった。私達は軍人会館でお互いの健闘と無事を祝し反省会を行った。それぞれの予定もあるので解散し自由行動をとった。私もほろ酔い機嫌となり町を歩いていたら。突然に後方で声があるので振り返って見ると、憲兵軍曹が兵隊を殴り、その上軍靴のまま足蹴りにしている。相手が悪いと思いながら行こうとしたが、余りにもひどいし、民衆の見ている前でもあり、何度もの殴る蹴るで見苦しく、見ていられなくなったので、仲に入り理由を聞くと、怒った声で「上官に欠礼をした。これは軍紀の弛緩だ」と言い手をゆるめない。私も傍観せざるを得なかった。憲兵は気がすんだのか、黙って行ってしまった。

兵隊を起こして聞いてみると、その兵隊は敬礼をしたと言っている。恐らく兵隊の言っているのが正しいと判断をした。なぜならば私にも経験があつて、相手の目に入らなければ欠礼と言われてしまうからであ

る。人の事ではあるが、おさまらないのが私の気持である。憲兵の傘のもとに弱い者をいじめる行為は許せないと思つて、憲兵隊に乗り込んだ。私の顔色でも変わつていたのか、態度がおかしかったか、入り口に立哨していた憲兵に帯剣の剣身を抜き取られているのを不覚にも気づかなかつた。

事務所につかつかと入つて見渡し、素早く先程の憲兵軍曹を見つけ、近寄るといきなり、二つ三つ殴つてしまった。その場にいた多数の憲兵に、腰掛けに羽交締めにされてしまった。この騒ぎを知つて隊長（憲兵大尉）が出て来た。隊長から理由を質問されたので、一部始終を話した。隊長は頷いて私の話を聞いていたが、軍曹に質問して結果、不問にしてくれた。時間は既に点呼を終わつている。恐らく部隊では一騒ぎしているだろうと思ひ、隊長にその話をすると、隊長も了解して私の部隊へ電話で説明してくれた。このように手厚く扱つてくれたのも、憲兵の入院患者がいて、よく見舞いにこられて顔見知りであつた事が幸いしたのではないかと思う。

短波ラジオで流す敵側情報が、流暢な日本語でハッキリと耳に入ってくる。それによれば、日本と三国同盟を締結しているイタリアは、既に昭和十八年九月八日に、またドイツは、昭和二十年五月七日と何れも連合国軍に無条件降服をしたとのことである。連合国軍はその全力を対日本軍攻略に向け、総攻撃開始であり、既にその矛先は日本全土に、また派遣軍に向けられ、沖縄では米太平洋艦隊が体当たり作戦を敢行し、大戦果を挙げているとの報道である。また本土決戦も近いと見られ、全国民総動員で老いも若きも、男女共々に、竹槍訓練を励み、米軍の本土上陸を迎撃する構えであるといわれている。本土空襲もますます苛烈さを加えているとの事である。

日本軍の派遣地にも米国軍の攻勢はますます激しく、既に玉砕の地域もあって、戦略は不利のようであり、悪化して来ている。ラジオ情報を聞いていると、何か身が引き締まり緊張してくる。

我が本隊も、第二部隊を編成し、貴志軍医中尉を長として、杭州方面に派遣せられることになった。昭和

十七年召集以来、同じ釜の飯を食ってきた同年兵とも初めて別れ別れになることになった。お互いの手を握りあい、武運を祈って別れた。

米軍の上陸企図が濃厚であるという情報で、拓旺の作戦が展開された。また本部隊員が他部隊への出向、本隊は徐州に残留隊を残し、海州患者療養所に集結等、あわただしさを増してきた。戦闘訓練も激しく、どうみても玉砕戦法のように思える。壁や障害物の乗り越え、輜重車を戦車と見做しての体当たり戦術の訓練などである。またどこからともなく情報として満州への移動が内定したとか、防寒被服が渡るとかの情報が出てくると思うと、今度は、米軍の上陸進撃阻止と迎撃のために一人用蛸壺掘りの命令が出て、必要外の人員は、その作業参加である。このような訓練、作業を考えあわせると現地点が決戦場になることも考えられ、身の引き締まる気持ちである。

昭和二十年八月十六日午前、木村副官に随行、随行員竹内伍長以下四人は徐州へ事務連絡のため出向する

(一節には山海関、北京ともいわれた)。徐州駅で木村副官とも別れ、我々は、行きつけの立食寿司屋に夕食を食べにゆく。ところが臨時休業の貼紙がしてある。馴染でもあるので扉を開けて店内に入り、腹が空いているから何でもできるもので良いから作ってくれと頼むと「駄目だ」と一言、それでも何とかしてくれと再三頼んで見た。

主人いわく「兵隊に食べさせる飯はないよ、部隊に帰って食べなよ」と剣もほろろである。頑固親父ではあるがどうも言い方がおかしいし、態度も変であるので、理由を聞いても言わず怒った表情をしているだけである。これは何かあるなと思ったので諦めて他へ行くことにした。

まず軍人会館へ行って見たがここも臨時休業である。日本人食堂を探し回ったが何れも全部臨時休業である。これは変だ、何か大変なことでもできたのではないかと胸騒ぎしてきたので、早々に留守隊へ戻ることにした。残留の兵隊が飛んで来て「竹内班長、日本は負けたよ、無条件降伏でポツダム宣言を受諾し

た」と言われたが、私は信用できず「そんな馬鹿なことがあってたまるか、南方派遣軍は知らず、支那派遣軍は負けてはおらんのだ。デマに惑わされるな」と言ってその話を打ち消してしまった。

ところが彼は「晩のラジオを聞いて下さい。天皇陛下の玉音放送があるから」と言った。そんな事より飯だ、飯だ、腹が空いてしょうがないから準備してくれと頼んだ。夜、ラジオ放送を聞いたけれど、陛下の声も遅しと師団司令部にスッ飛んだ。司令部は普通は、毎日各机上は書類の山で多忙を極めている。ところが綺麗に片付き、人も少なく、下士官が将校でもいれば、その真偽をたしかめることができるのにも思い、軍医部に福岡薬剤中尉が出向しているので尋ねて見ると不在である。薬剤倉庫かもしれないと早速行って見た。

中尉殿が一人で黙々として、1ccのアンブルに液を入れてるので、近づいて「中尉殿、何をしているのですか」と聞くと「青酸カリだよ」と言われた。私は

ビツクリして「何に使うのですか」と聞くと「敵が進駐して来た時、どんな事が起こるか分からないし、万一にも婦女子が辱めを受けるようなことがあってはならないので、護身用に所持させ飲んでもらうんだよ」と。私は「それでは自殺じゃないですか」と言えば「生きて恥をさらすよりましだよ」との事であり、兵隊の自決と同じである。「福岡中尉殿、充分注意して取り扱って下さい」と言って留守隊に帰隊した。

福岡中尉の言葉や師団司令部の模様で敗戦であるという真実性を知ることができた。早速に、機密漏洩維持のためと、復員に支障があったとは思ひ、丸秘重要書類その他を焼却するのに二日もかかってしまった。

〔編注〕

竹内章氏の手記（その一）は、第Ⅷ巻に掲載されておりませぬ。

第十三師団

山砲第十九連隊

―戦友を背にして―

宮城県 加藤 侃 一

私は大正十（一九二一）年二月二十八日生まれで、昭和十六（一九四一）年徴集の現役兵であります。新潟県高田市にある独立山砲兵第一連隊（東部第二十八部隊・現陸上自衛隊高田駐屯地）に昭和十六年十二月十五日に入隊し、三カ月間本科の教育を受け、一期検閲後、本科より隊付衛生兵に転じ、仙台陸軍病院において五カ月間の衛生兵教育を受けました。

中支派遣軍第十三師団（鏡部隊）山砲兵第十九連隊に転属のため、昭和十七年七月下旬に仙台出発、同年八月上旬に上海郊外の呉淞に上陸、ここは草原地帯でアンペラの仮宿舎でした。二日程滞在休養し、以後本隊に追及し山砲兵第六中隊付衛生兵として配属になり